

日本図書館協会『図書館建築賞』受賞作品について

Libraries received JLA Library Architecture Award

野村 公子[†]

概要 近年の情報化が進む時代に伴い、公共施設である図書館建築の建築設計プランが大きく様変わりしてきた。優れたデザインと公共性のマッチング、それに加えてデジタル資料の増大やユニバーサルデザインの要素を含んだ建築物が要求される。優れたデザインの図書館を研究し、これからの図書館建築のあり方を提案していきたい。そのための指針として、日本図書館協会の『図書館建築賞』最近 10 年間の受賞作品について、日本図書館協会の評価項目と照らし合わせて検証したい。

キーワード 図書館建築、ユニバーサルデザイン、市民サービス、総合的空間計画

Keywords Library Architecture, Universal design, Citizen service, Synthetic space plan

1 はじめに

日本図書館協会『図書館建築賞』の受賞作品選出のため、日本図書館協会では評価項目を決め、受賞作品の評価基準を決め公表をした¹⁾。本稿ではその指針を受けて、過去 10 年間の『図書館建築賞』受賞図書館の考察をする。

2 図書館法と関連法規から

『図書館法と現代の図書館』は、「第六章図書館法と関連法規」の中で、公立図書館と都市機能との関係について記述している²⁾。都市計画上の公立図書館の位置づけは、都市計画法の第 11 条第 1 項 5 号に「学校、図書館、研究施設その他の教育文化施設」とあげられ、潤いのある計画的な都市づくりに必要な都市施設の一つとして認められており、都市計画決定の対象となる。

3 公立図書館の任務と目標

また、日本図書館協会の公立図書館政策文章である『公立図書館の任務と目標 解説改訂版』では、第 4 章公立図書館の経営」で、次のように施設のことに触れている³⁾。

- ・ 図書館側の構想が反映され、住民の意向もとりのれた建築計画を提示することが不可欠である。

- ・ 単独施設であることが望ましいが、複合施設となる場合は図書館施設としての機能を損なわないよう、独立して管理・運営ができるようにしなければいけない。
- ・ 住民の生活動線上にあり、建物は明るく、親しみやすく、利用者が気軽に使える施設でなければならない。
- ・ 館内は、利用者にとってわかりやすい構成であり、図書館員にとっても働きやすい施設で、また障害者が利用できる施設にするべきである。

この方針は、ここで「住民」を「利用者」と読み替えればすべての図書館を建築系確認において重要なポイントである。

4 図書館建築賞の評価項目について

日本図書館教会建築賞の趣旨と選考の基本として、「日本図書館協会建築賞は、日本図書館協会が『優れた図書館建築を顕彰し、それを広く世に知らせることによって、図書館建築の質の向上を図ること』を目的として定めるものです。優れた図書館建築とは、建築の質はもとより、そこで展開されているサービスもよく行われていることが条件となります。つまり、器（建築）と中身（サービス）が調和し、いずれにおいても優れていることを意味します。」とあり、選考はその趣旨に則って行われる。

選考基準・評価の考え方として、

- 1) 器（建築）としての評価の考え方を①機能性・社会性②構造的・技術性③造形性・文化性の面から捉

[†]大阪市立大学大学院創造都市研究科・都市情報学専攻
情報メディア環境研究分野 学籍番号 M05UC517

え、図書館サービスを行うための「手本となる建築」を選ぶためにバランスのとれた評価項目を設定し、総合的に考えるものとする。

2) 中身(利用・サービス)としての評価の考え方として、「利用者の使いやすさ」「サービスの提供のしやすさ」「快適性」および「社会的意識」に力点がおかれ、使う側からの評価の視点は重要である。サービスがよく行われているスペースとなっているかどうかの視点から評価する。社会的意義の評価については、説得力のある新しい提案・工夫をされているかが評価に含まれる。

以上のことから評価項目として、

A. 図書館建築としての全体の構成・内容

- 1) 配置・配置計画
- 2) 資料の規模とサービスの構成

B. 建築計画スペース

- 1) 建築の構成・ゾーニング
- 2) カウンター・家具・サインの配置とデザイン
- 3) 空間の快適性
- 4) 建築技術的评价
- 5) 維持管理
- 6) 計画・設計のプロセス
- 7) その他の建築的配慮

C. サービスの提供・利用

- 1) サービスの展開
- 2) 管理・運営
- 3) サービスの実績

D. 特徴となるポイント(特記事項)

に分けて設定し、評価採点表を用いてポイントをつけて評価し、受賞館を決定するときの大きな基準とする。

5 日本図書館協会建築賞受賞館の検証

各受賞図書館の特色を応募申込書と受賞書評とを照らし合わせて検証する。

・第10回 湖東町立図書館(滋賀)

「ふるさと創生一億円」の使途について住民投票の結果、「図書館建築」が2位に選ばれた。県外から図書館長予定者を招き、町民中心で「図書館開設準備委員会」を創設し、利用者、職員の立場からも利用しやすい工夫に満ちたやすらぎのある図書館が完成した。公共図書館サービスの浸透度が高い滋賀県内で、建物の居心地の良い空間デザインと、高い貸

し出し実績、館員からの評価の高さで受賞となった。

・第11回 中津市立小幡記念図書館(大分)

古くからの城下町で、学問に熱心な土地柄である。建物を道の前面一杯に配し、軒の高さを低くすることによって町並みに溶け込むように意図されている。開架室中央に吹き抜けが設けられ、空間の開放感が高い。高窓からの自然光を採り入れ、開口部を巧みに利用したデザインになっている。

・第11回 へきなん文化村 碧南市民図書館(愛知)

碧南市芸術文化ホールとともに「へきなん芸術文化村」を構成している。図書館と芸術文化ホールは中庭を取り囲むように配置され、一体的な活用を意図して計画された。計画段階からの創意と開館後のサービス運営の展開が評価された。

・第11回 武庫川女子大学付属図書館(兵庫)

大学図書館の運営に造詣の深い図書館長を招いて準備を積み重ねた。文学部研究室との複合施設として建設され、7階から10階は拡張時には収蔵スペースの計画がされている。限られた条件の中で多くの問題をクリアしている。

・第12回 小田原市立かもめ図書館(神奈川)

周囲の山の景観と連携させるうねりのある屋根のデザインで住宅地の中でも違和感なく融合している。平面的にワンルームとして広がりながらも、空間の上では変化に富んだ明るい構成であり、機能の差異を、空間の変化とマッチさせた建築的な試みが高く評価された。

・第12回 市川市立中央図書館(千葉)

「メディアパーク市川」として、中央こども館・映像センター・教育センターと共に生涯学習センターとして構成され、図書館はその中核施設となっている。中心軸の設定によってわかりやすい平面を実現している。図書館職員の作業環境も配慮されるなど、各部に新しい提案があり、大半が成功している。

・第13回 伊万里市民図書館(佐賀)

市民参加を経て誕生した図書館であり、すべての人に「私の場所」がある設定をしている。市民の交流の場としての工夫が随所に見られ、郷土色豊かな表現は図書館を身近なものに感じさせている効果がある。市民参加の図書館づくりを実現させた好例で、開館1年目の登録率が43%、市民一人当たりの貸出冊数が9.3冊という高い数値となって現れている。

・第13回 神戸(ごうど)町立図書館(岐阜)

「バラのまち」として知られる町で、「庭園のなか

の図書館」として周囲の自然形態との対比で漆喰壁の白を基調として構成されている。開館時間に利用されるブロックと会館時間以外でも利用される多目的ホール・会議室ブロックを、玄関ホールを介して分離しつつ建物の中心軸をなす2層吹き抜けの柱廊空間で一体化を図ろうとした設計意図が特徴。

・第13回 富士市立中央図書館（静岡）

市民の声を聞くことと図書館職員の知恵を集めることを重視した準備活動が開始され、「図書館とは本と人・人と人との出会う場所」と位置づけられた。市民生活動線にある場所が選ばれ、年間貸出100万冊を超える利用につながった。中都市の中核的な図書館として、施設・運営ともに優れている。

・第14回 大阪府立中央図書館（大阪）

中之島・夕陽丘両府立図書館の狭隘化の一方で、生涯学習・高度情報化社会にふさわしい総合的な図書館サービスの拠点を求められ建設された。立地条件を生かして物流の拠点として市区町村立図書館への支援を展開している。

・第14回 大阪市立中央図書館（大阪）

地方自治体の中では述べ床面積・蔵書収容力では最大規模である。地下鉄から直接アプローチできるエントランスを持ちギャラリーを設けるなど、入りやすく、“ヒューマンライブラリー”としてあらゆる人に開かれ、人と本や情報が出合える図書館をめざしている。立地の良さ、十分な開架図書数、多様なサービスの提供で、開館後1年余りで来館者が200万人を超え、1日平均9,000冊の貸出を記録し、多くの市民に親しまれている。

・第15回 豊の国情報ライブラリー（大分）

「一村一館」体制を支援する中で図書館振興の中核となる施設と位置づけられて建設された。県立図書館の中で第2位の貸出実績を挙げている。複合施設でありながら、図書館部の入口がわかりにくいのが、建物の持つ力強さは他館にはないものである。

・第15回 関西学院大学図書館（兵庫）

スパニッシュ・ミッションスタイルで統一された旧図書館の時計台との調和が要となっている。風致地区の制約はあるが、サンクガーデンで採光を確保し、地下の閲覧スペースを確保して必要面積を確保している。知的活動の場として気品と活気との調和がうまく図られた大学図書館である。

・第15回 ブリティッシュ・カウンシル図書館情報センター（東京）
鮮度のよい情報はオンラインで流れ、オールドメ

ディアである図書はそれを支える役割を果たす。ショールームのようなデザインで軽快な空間は、オンラインデジタル図書館の先駆けで、生きた情報施設という両面で参考にすべき事例である。

・第16回 下館市立図書館（茨城）

建築技術的に新しい手法が採り入れられ、図書館建築の規範となる要素を持つ。河川敷と一体的に整備したことによって、図書館サービスとともに眺望も市民のものになり、心豊かにする魅力的な場所と時間を提供する場となる。

・第16回 洲本市立図書館（兵庫）

紡績工場跡地を整備し、紡績工場のレンガ造りの周壁を保存し、その中に図書館を納めたものである。解体したレンガが再利用されたり、伝統的な左官技術を使って仕上げたり、郷土色を盛り込んでいる良い例である。

・第16回 宇佐市民図書館（大分）

広い市域の中心部に位置する行政・文化ゾーンに立地している。自然光のあふれる一般開架スペースを中心に連続感のある空間構成で結ばれている。将来レイアウトの変更に対応できるよう、柱のない空間や二重床としている。市民の情報交換や行事・展示スペースがたっぷり確保されている。

・第17回 吉田町立図書館（静岡）

“川に語りかける図書館づくり”を考えかたの基本にし、川に沿って展開した構成となっている。三つのエントランスをもつアプローチが特色となっている。特に児童へのサービスに重点をおいた運営をしている。

・第17回 不知火町立図書館（熊本）

海上の蜃気楼「不知火」をイメージしてデザインされたアルミルーバーのスクリーンは独創的で、南国の強い日差しを制御し間接的な自然光により明るく快適な空間をつくり、省エネにも寄与している。併設した美術館との連続的な平面計画で複合的な施設利用に対応するフレキシビリティの高い空間としている。

・第18回 石狩市民図書館（北海道）

“図書館の中に街の賑いをつくろう”とのコンセプトで、屋内ストリートを軸に資料提供と集会・交流の場を振り分けている。北海道福祉のまちづくり賞優秀賞、バリアフリーデザイン協議会のバリアフリー大賞を受賞し、障害者の利用も盛んである。

・第18回 むつ市立図書館（青森）

レンガ造りの独創的なデザインと質の高い空間をもつ建築である。六つのゾーンが「ガレリア」を軸に接合した複合体となっている。ガレリアを中心軸として、成人と子どもの開架室を明解に直交させ、使いやすさ、分かりやすさを図った。利用者にあわせた読書空間の提示をしている。

・第18回 明治大学図書館（東京）

教育棟「リバティタワー」に接続する低層棟に配置され、敷地の有効利用が評価された。また、電子図書館機能の充実で今後の大学図書館の参考となる配慮が多い。

・第19回 茨城県立図書館（茨城）

県庁移転に伴い議事堂を転用改修した。公共施設を使い続けるという持続型社会のテーマのひとつを具現化した好例で、改修という手法で図書館建築の新たな可能性を広げる事例となる。

・第19回 千葉市中央図書館（千葉）

人と本との身近な関係をつくり出すことに主眼をおいた図書館である。中央図書館と生涯学習センターが併設され、複合施設となっている。子供たちの調べ学習のリードや、開館時間の延長によってビジネス支援を積極的に行うなどの実用支援型による攻めのサービスで予想以上の利用者を生んだ。

・第20回 国立国会図書館関西館（京都）

設計のコンセプトは、開発の途上にある周辺環境の中で将来の規範となる外部空間の創出と、学術・研究都市の中核施設としての象徴性を持った佇まい、そして失われた雑木林の再生。電子情報システムの将来の拡張を見通した合理的全体構成である。

・第20回 広島修道大学図書館（広島）

既存図書館と新たに増築した図書館を一体化し、建物の超寿命化、環境に配慮した施設作りをした。設計のコンセプトとしては、キャンパスの中心としての図書館、学生、研究者にとって魅力ある図書館、新旧一体化した経済的で使い易い図書館、環境に配慮した施設づくりの4点があげられる。

・第21回 斐川町立図書館（島根）

開館の準備段階から「建設基本計画」を設置し、公開プロポーザル方式による設計者の選定、町民を交えた協議を重ねての設計過程を経ている。

建設のさまざまな段階で町民が関与したことにより、「自分たちの図書館」意識がおこり、行き届いたサービスと共に来館者数や貸出冊数の増加につながり、今後の発展に期待する。

6 あとがき

近年、図書館建設の敷地確保が困難となってきており、単独で計画するのではなく複合施設として計画されたり、既存の建物を利用して増築・改築するケースが多くなってきている。そのような場合でも快適で市民サービスの行き届いた空間となるような図書館計画が今後必要となると予想される。

なお、末尾になったが本調査を進めるにあたって、建築賞受賞作品の資料提供の労をいただいた日本図書館協会の我妻滋夫氏、磯部ゆき江氏に感謝を申し上げる。また、指導教官である北克一先生には、日本図書館協会との資料悦間交渉、本稿のまとめなどにおいて、多くのご指導をいただいた。

注

- 1) JLA 施設委員会「日本図書館協会建築賞の選考のための評価項目について」『図書館雑誌』Vol. 99 No. 8, 2005. 8, 519-521.
- 2) 塩見昇、山口源次郎編『図書館法と現代の図書館』第2刷日本図書館協会, 2005, p. 86-93.
- 3) 日本図書館協会特別政策委員会『公立図書館の任務と目標 改訂版』日本図書館協会, 2004, p. 69-71.

[参考文献]

- ・第26回 図書館建築研修会『よい図書館をつくるための計画』2004年11月 主催；日本図書館協会
- ・公共建築 特集 公共建築と評価の視点『公共施設としての図書館の評価』糸賀雅児著 2004年7月
- ・カレントアウェアネス 国立国会図書館 関西館 事業部 図書館協力課編 No. 286 (2005年12月)：社団法人 日本図書館協会

[資料協力]

- ・ 日本図書館協会 (Japan Library Association)
<http://www.jla.or.jp/> (確認 2006-03-1)